



く。箱には仕掛けがしてあって、その仕掛けを解かないと蓋はあかない。さて、どちらが早く箱の仕掛けを解き、バナナを手に行けるか。

チンパンジーは部屋に入れられると、すぐに箱に近づいてそれを揺すったり、仕掛けをいじくったりする。しかし、箱は簡単にあかないから、かれはその回りを走り回ったり、飛び越えたり、また、仕掛けをいじったりしての **II** を繰り返す。そうしているうちにやっと解き方がわかって、バナナを取るのに成功する。その所要時間を、仮に十分としよう。

今度はオランウータンで同じテストを行ってみる。こいつはまるでうすのろのように、のっそり箱に近づくと、そのぶつと指で、仕掛けを **□** 器用にいじってみる。そして何事もなかったかのように部屋の間に戻り、物憂い顔でじいっとうずくまっている。何を考えているのか、そもそも問題箱に興味をもっているのかも、さっぱりわからない。かれは、いじくっては、またうずくまるということを、二、三度繰り返すと、やがて決意したように箱に近づき、さっと仕掛けを解いてしまう。始めからバナナを取るまでの時間が、やはり十分。

チンパンジーは懸命になって解くことに努力し、バナナを手にとると飛び上がって喜んだ。オランウータンは臍をいじったり足をかいたりして、真剣な様子がさっぱり見え、バナナを手にしてもぶすつとして何の感動もないような顔でむしゃむしゃと食べる。まことに対照的であるが、知能程度の比較においては、どちらに軍配をあげることもできない。つまり引き分けである。

**C** ここで大切なことは、両者の問題解決の方法、試行のパターンがまるで逆だということである。チンパンジーはいわば、発散的思考型、**II** を繰り返して問題を煮つめていく。オランウータンは思考集中型で、直感的に問題を解くタイプなのである。

人間にはチンパンジー型があつて良く、<sup>③</sup>オランウータン型があつて良いであろう。ところが、今の学校における子供の能力評価は、チンパンジー型を良しとして進められているようである。例の○×式の考える暇を与えないテストなどは、その象徴的評価法であつて、オランウータン型の子供は、まず、良い点が取れないようになってきている。そういう子供が「落ちこぼれ」

の名であつさり切り捨てられてしまつてゐるのは、大変悲しいことである。(中略)

独創性というものは、周囲にゆとりある目差しがなければ育たない。せつかに教えるのではなくその人自身のもつてゐるものを自分で育てていくだけの余裕を与えられなければ、<sup>④</sup>独創性の種子は育ちようがないのである。

独創性とは、既製のものでないものを創つたり、考えたり、発見したりするという意味で、一つの調和を破ることである。しかし、この調和を破るに至るまでには、個性や資質が自ら大地から芽を出し育つていくための、ゆつたりした時間の流れが必要なのだ。

調和を破るもろもろの個性が集まつて、一つのダイナミックな調和をもたらす学問の雑木林こそ未来の学問の世界の理想郷であろう。

(河井雅雄「学問の冒険」による)

問1 **A** **C** に入る最も適切な語句を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ たとえば ウ つまり エ むしろ オ しかし カ たしかに

問2 **I** **II** に入る最も適切な四字熟語を、次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 七転八倒 イ 種々雑多 ウ 大同小異 エ 枝葉末節 オ 試行錯誤 カ 右往左往

問3 **——** 線部「様々な」の品詞名を答えなさい。

問4 **□** 器用の空欄に、打ち消しの意味を表す漢字を一字入れて、三字の熟語を完成させなさい。

問5 **——** 線部①「私が望んでいる教育環境」と対照的なものとして取り上げられている言葉を、本文中から十六字で抜き出して答えなさい。

問6 **——** 線部②「チンパンジーとオランウータンを使って問題解決についての知能テストが行われた」とありますが、このテストを通じてわかったことについてまとめた次の文の ( ) に当てはまる言葉を、本文中よりそれぞれ抜き

出して答えなさい。ただし、(Ⅰ)は三字、(Ⅱ)は四字とする。

チンパンジーとオランウータンは、問題解決の方法は(Ⅰ)であるが、知能程度に関しては(Ⅱ)である。

問7 線部③「オランウータン型」とはどのような人物ですか。「……人」に続く形で、本文中から十六字で抜き出して答えなさい。

問8 線部④「独創性の種子」とは何の比喩ですか。本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問9 線部⑤「学問の雑木林」とはどのような環境をさした表現ですか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お互いの個性を尊重し合い、足りない部分を補い合うことによって物事を創り出す環境。
- イ 天性の才能をもった人間が集まり、常識では考えられないような発想が生みだされる環境。
- ウ 画一化された教育によって、全員が同じ目的をもって問題解決のために全力で取り組む環境。
- エ 様々な個性をもった人間が集まり、今までになかった独創的な考えや発見が生まれる環境。
- オ 失敗してもあきらめない人間が集まり、直面した問題を一つ一つ粘り強く解決していく環境。

二 次の①～⑤の各文の——線の部分の読み方を平仮名で答えなさい。

- ① 和やかな雰囲気。 ② 遠足の支度を調える。
- ③ 賃貸住宅に住む。 ④ 憂慮すべき事態。
- ⑤ 優れた人の逸話。

三 次の①～⑤の各文の——線の部分を漢字で答えなさい。ただし、必要なものには送り仮名をつけること。

- ① シャワーをアピル。 ② 学級委員長が文化祭委員長をカネル。
- ③ 病人をカイホウする。 ④ 桃のシユウカクが始まる。
- ⑤ ケイトウ立てて説明する。

四 次の文章は、森絵都の『子供は眠る』の一節である。中学三年生の章、<sup>あきら</sup>中学二年生のぼく(恭)、<sup>ともあき</sup>智明、中学一年生のナス、ナスの弟で小学四年生のじゃがまるの五人はいとこ同士である。五年前から五人は章の別荘で夏休みの二週間を過ごしているのだが、ぼく、智明、ナスの三人は章に対して反感を抱くようになっていた。三人の態度の変化に気づいたじゃがまるは泣きながら三人を非難する。そんな状況の中、章は来年の夏休みから別荘には来ないことを三人に伝えた。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくらの夏が今年で終わる。完全に終わる。

そしてもう二度と、始まらない。

<sup>罪し</sup>小野寺さんの料理をダイニングに運ぶあいだも、その皿をテーブルに並べるあいだも、ぼくらは二様にだまりがちで、動きもどこかぎこちなかった。あの器用な智明が花瓶を倒した。ナスはみそ汁の椀<sup>わん</sup>にごはんをよそった。ぼくはみんなで食べるニラ炒<sup>いた</sup>めの大皿にソースをかけてしまった。めちやくちやだ。

ほくも、<sup>a</sup> 智明も、ナスも。だれもが似たようなショックと、そして似たような後ろめたさを感じていたのだと思う。そんなほくらに比べたら、かえってじゃがまるのほうが冷静だった。

十二時を少しまわったころ、章くんと一緒にもどつて来たじゃがまるは、赤い目をしながらも精一杯、中学年としての威厳を示してくれた。

「さっきはちょっと、おとなげなかったよ」

ぼつりと言って、テーブルの椅子に腰かける。

「あのこと、聞いた？」

ナスが尋ねると、

「うん。でも、ほく、もういいんだ」

両足をぶらぶら揺さぶりながら、じゃがまるはもう何もかもあきらめきつたような口ぶりで、

「でもさ、そういうことだったら、もっと早く言ってくればよかったのに」

それにはほくも同感だった。

章くんはどうしてだまってたんだろう？

① こんな大事なことを、なんだって今まで隠してたんだ？

ほくは問いかけるように章くんを見た。章くんはほくがソースをかけたニラ炒めを噛みしめているところだった。ほくの視線に気づくと、たちまちけわしい目つきになって、

「あんな、恭」

ほくは A 身を引いた。けれど章くんの口から出てきたのは、ほくの恐れていたソースの話題じゃなかった。

「午後、また競泳するぞ」

みんなで勝負する競泳なのに、章くんはほくだけを見つめて、言ったんだ。

<sup>b</sup> 「これが最後の勝負だ。がんばれよ」

天気の良い日には、空と海のあいだに佐渡島が見える。今日みたいな晴天の日には粟島も見える。

水平線に浮かぶその二つの島にむかって、ほくらは平泳ぎでゆっくりと進んでいった。

最後の競泳。

一キロほど沖へ出ると、そこをスタートラインに、今度はクロールでの本勝負だ。

スタートの直前、章くんに「行くぞ」と頭をはたかれて、ほくはこくんとうなずいた。

「よいい、スタート」

ほくらは陸へむけていっせいに泳ぎ出した。

強烈な午後の日ざしが空のてっぺんから五つの頭を照らします。それはまるでカメラのフラッシュライトみたいに、息つぎのたびにほくの瞳を直撃した。額のあたりに一瞬の風を受けとめて、ほくは再び水の中へすべりこんでいく。

ほくはもう手をぬかなかつた。がむしゃらに手足を動かし、高々としぶきをあげて、陸へ、陸へと突進していく。

二百メートルほど来たあたりで、ほくは早くも章くんをぬいていた。そんなペースじゃ最後までもたないから、やや速度をゆるめて体を休ませる。そのあいだも背後から章くんの追ってくる気配はなかった。それどころか距離はどんどん開いていく。

これじゃ前回のいかさまを白状しているようなもんだけど、ほくはそのままっつ走った。

わざと負けるなんて、もういやだ。「がんばれよ」とはっぱをかけられたとき、ほくは章くんの目を正視できなかつた。あんなやましさはたたくさんだ。

ラスト百メートルの地点で、ほくはスパートをかけた。うまく波に乗って体を押しだす。ありったけの力をこめて海をかきわけ。

気がつくとき、ほくは断トツの一位で陸の上にあった。

力を出しきったへ X」と、同じくらいのへ Y」。

砂浜で呼吸を整えていると、数十秒遅れでゴールした章くんが疲れた足どりで歩みよってきた。すうっと右手をさしだしたので、反射的にほくも右手を出すと、その手をパシヤリとやられ、おまけにほおをつねられた。

「いて」

ほくが顔をしかめると、章くんは愉快そうに B 笑い、そのまま別荘へ引きあげていった。やせつぼちの後ろ姿が、蟹気楼しんきろうのむこうにかすんでいく。

ほくはその場にへたりこみ、大の字になってまぶたを閉じた。

潮と魚とこんぶのにおい。

大きく息を吸いこむと、胸がつかまって、苦しくなった。

章くんにつねられたほおがじんじんしていた。

どれくらいそのまま寝ころんでいただろう。体じゅうに貼りついた水滴が乾ききったころ、死体みたいにじっとしていたほくを、だれかが親切に埋めはじめた。ひざのあたりにひやつとした感触。見ると、じゃがまるがせつせと砂をかけている。

「ついに勝ったね」

目が合うと、じゃがまるは言った。

「うん」

ほくがうなずくと、じゃがまるは急に声を落として、

「でも、ほくはもう一生、恭くんや章くんに勝てないんだ」

その思いつめたような口ぶりに、ほくはあわてて言いかえした。

「なんでだよ、じゃがまる。そんなことないよ」

「だって、もうこんなふうにみんな泳ぐことなんてないでしょ」

「うーん」

「ほらね」

「いや……、でもさ、じゃがまる」

③ ほくは必死で言葉を探した。

「そりゃあ、ほくらの競泳はこれで最後かもしれないけど、でもきつとそのうち、ほくや章くんよりずっと速いやつが、じゃがまるの前に現れるよ。じゃがまるがそいつに勝ったら、それはさ、ほくや章くんにも勝ったってことだろ？そしたら手紙でも書いて知らせてくれよ」

「うん。それはいいかもね」

じゃがまるは大まじめにうなずいた。

「でも、何年かかるかなあ」

「すぐだよ、じゃがまるなら。だってほくがじゃがまるくらいのころはさ、泳ぐどころか、海がこわくて近づけなかったんだから」

「恭くんが？」

「うん。なのに章くんってば、ほくの手を C つかんで、ぐいぐい引っぱって、水の中に放りこむんだ。もう、悪魔かと思つたよ。ぎゃーぎゃー泣きながらバタバタやって、必死で陸に逃げようとして……。でもさ、そうこうしているうちにちよつとずつ、ちよつとずつ、泳げるようになっていったんだ」

④ しゃべりながら、ほくは再びまぶたをおろしていった。

波打ち際でナスと智明がじゃがまるを呼んでいる。何かめずらしい貝殻を見つけたらしい。

じゃがまるは「目散に駆けていき、ほくは右手をそうつと動かして、章くんにつねられたほおに当てた。

まだ、じんじんしていた。

とうぶん消えそうもない痛みだった。

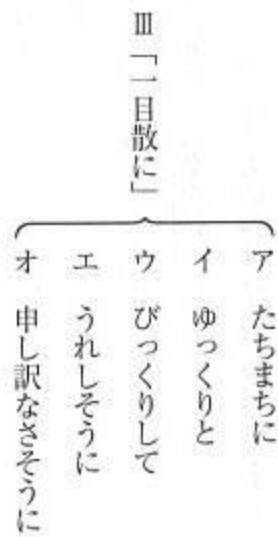
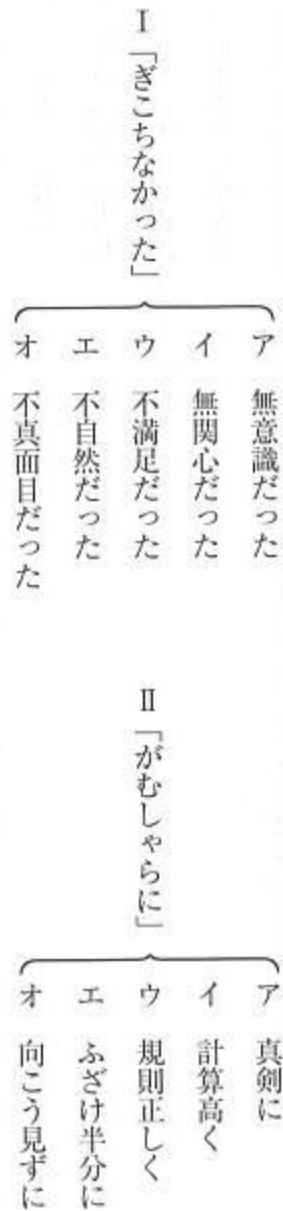
【注1】 小野寺さん：別荘の管理人。

【注2】 「午後、また競泳するぞ」：数日前にも五人は競泳をしている。

問1 [A] [C] に当てはまる語句を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さっと イ そっと ウ がしっと エ びくんと オ からからと カ にたにたと

問2 線部Ⅰ「ぎこちなかった」・Ⅱ「がむしやらに」・Ⅲ「一目散に」の意味として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



問3 ……線部a～dについて、(A)品詞が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。また、(B)その品詞名を漢字で答えなさい。

問4 〈X〉・〈Y〉にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア (X) 達成感 Y 不快感      イ (X) 爽快感 Y 脱力感      ウ (X) 責任感 Y 違和感  
 エ (X) 解放感 Y 悲愴感      オ (X) 罪悪感 Y 親近感

問5 線部①「こんな大事なこと」とはどういうことですか。「……ということ。」に続く形で本文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問6 線部②「前回のいかさま」について述べた次の文の( ) に当てはまる言葉を、本文中の語句を用いて五字以内で答えなさい。

この表現は、前回の競泳でほくは( ) ということを意味している。

問7 線部③「ほくは必死で言葉を探した」におけるほくの心情として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 聞き分けのないじゃがまるに、少しずついらだちを感じている。  
 イ 悲しんでいるじゃがまるに、かける言葉がなくつらく思っている。  
 ウ 不満を抱いているじゃがまるを、理屈で納得させようとしている。  
 エ 落ち込んでいるじゃがまるを、何とかして元気づけようとしている。  
 オ 沈んでいるじゃがまるだが、幼いのでごまかせるだろうと思っている。

問8 —— 線部④「しゃべりながら、はくは再びまぶたをおろしていった」におけるはくの心情として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ジャがまるとのやりとりを通じて章の真意に気づき、それを理解できなかった自分を強く恥じている。
- イ 章との楽しい思い出を振り返るうちに、自分は取り返しつかないことをしてしまったと後悔している。
- ウ 章が自分にしてきた理不尽な行動の数々は、本当は自分を強くさせるためのものだとなり、驚いている。
- エ ジャがまると話しているうちに、最も年上だった章が苦勞していたことに気づき申し訳なく思っている。
- オ 章が自分の成長に強く影響を与えていたことに改めて気づき、章に対する感謝の念がわきあがっている。

五 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、<sup>〔注1〕</sup>もろこしに宝志和尚といふ聖<sup>〔注2〕</sup>あり。いみじく尊くおはしければ、御門<sup>〔注4〕</sup>「かの聖のすがたを、影<sup>〔注3〕</sup>に書きとらん」とて、絵師三人をつかはして、「もし一人しては、<sup>①</sup>書きたがゆる事もあり」とて、三人して、面々にうつすべきよし、<sup>〔注5〕</sup>仰せふくめられ、つかはさせ給ふに、三人の絵師、聖のもとへ参りて、かく<sup>〔注6〕</sup>宣旨を蒙りてまうでたるよし申しければ、「しばし」といひて、法服の装束<sup>〔注7〕</sup>して出であひ給へるを、三人の絵師、おのおの書くべき絹<sup>〔注8〕</sup>をひろげて、三人ならびて筆をくださいさんとするに、聖「しばらく。我まことの影<sup>〔注9〕</sup>あり。それを見て書きうつすべし」とありければ、絵師、<sup>〔注7〕</sup>左右なく書かずして、聖の御かほ<sup>〔注10〕</sup>をみれば、大ゆびのつめに、額の皮をさしきりて、皮を左右へ引きのけてあるより、金色の菩薩の、かほをさし出でたり。一人の絵師は、十一面観音とみる。一人の絵師は、<sup>〔注11〕</sup>聖観音とおがみ奉りける。おのおの見るままにうつし奉りて、持ちて参りたりければ、御門おどろき給ひて、別の使<sup>〔注12〕</sup>を給ひて、<sup>③</sup>問はせ給ふに、<sup>④</sup>かい消つやうにして失せ給ひぬ。それよりぞ「ただ人にてはおはせざりけり」と申しあへりける。

〔宇治拾遺物語〕による

- 〔注1〕 もろこし…中国。
- 〔注2〕 聖…徳の高い人。
- 〔注3〕 おはしければ…いらつしやったので。
- 〔注4〕 御門…皇帝・天皇。
- 〔注5〕 仰せ…ご命令。
- 〔注6〕 宣旨を蒙りて…御門のご命令を受けて。
- 〔注7〕 左右なく…すぐには。

問1 —— 線部 a 「まうで」・b 「かほ」を現代仮名遣いに直して答えなさい。

問2 〰〰〰線部 A・B 「影」の本文中での意味の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A 人かけ B 物かけ
- イ A 肖像画 B 姿
- ウ A 人かけ B 姿
- エ A 姿 B 肖像画
- オ A 肖像画 B 人かけ

問3 —— 線部②「しばし」・③「問はせ給ふ」のそれぞれの主語として、最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 宝志和尚
- イ 御門
- ウ 絵師
- エ 筆者
- オ 別の使

問4 —— 線部①「書きたがゆる」・④「ただ人」の本文中での意味として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ①「書きたがゆる」
- ア 書き加える
  - イ 書き間違える
  - ウ 書かない
  - エ 書くことができない
  - オ 書かせない

- ④「ただ人」
- ア 正直な人
  - イ 悪い人
  - ウ 誠実な人
  - エ 普通の人
  - オ 身分の高い人

問5 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい

ア もろこしに宝志和尚という絵の上手な聖がいた。

イ 御門は宝志和尚の正体を見抜き、その姿を絵に描かせようとした。

ウ 宝志和尚という聖の正体は、実は金色の菩薩であった。

エ 御門は、宝志和尚に絵の手ほどきを受け、絵師となった。

オ 絵師たちは、宝志和尚の功德くんとくにより、金色の菩薩になった。